

**アメリカ的な物語の書き方：
現代ネイティブ・アメリカン作家ルイズ・アードリックの
近年の作品に描かれる伝統の諸相**

鶴谷千寿

**The Art of Writing American Stories:
The Native American Traditions in Louise Erdrich's Latest Works**

TSURUTANI Chizu

(要旨)

Louise Erdrich (1954～) ルイズ・アードリックは北米インディアン・チペワ族の血を受け継ぐ作家である。従来の彼女の作品は現実の保留地に住む部族の物語を描くことが多かった。しかし最近の彼女のいくつかの作品には変化が生じている。それは、以前より詳しく様々な部族の伝統文化の表象に力を入れ描いている点である。そして同時に一方では反対の試みも成されている。例えば登場人物の名前を従来の部族的な名前から一般的なアメリカ人の名前へとオリジナルの物語から改訂版では変更し、保留地とアメリカ連邦政府との関係の実際の歴史を可能な限り詳細に描いていることである。これらの一連の変化から見られるのは、アードリックの小説では、太古から続く先住民族の壮大な伝説や歴史背景という世界と実際のアメリカの歴史例えば連邦政府、州政府との狭間で翻弄された人間の考え、行動、そしてそれによって露呈された人間性を盛り込みながら小説を描くことに関心が移行していると考えられる。これらはアメリカを理解するうえで欠かせない視点でもある。なぜならば普遍的な価値を推しつつも、同時にその過程で起こりうる矛盾も含めるのがアメリカの世界観だからである。地域と世界、非日常と日常、伝説上の動物・人間と実在する人間と相対する世界や存在において、その中で芽生える人間性に着目し、アードリックはアメリカにおける先住民族の伝統文化の生き残りとの発展とも読める小説をこの人間性の芽生えを通して描いていると考察する。

キーワード：アメリカ的正義、伝統文化（先住民族）、ネイティブ・アメリカン、人間性

(要旨)

Louise Erdrich (1954～) has published several works of fiction about the present Native Americans on reservations. Recently, however, she has changed her style of writing fiction. She portrays both mythical and real histories of the people on reservations on a full scale. Erdrich's recent change in writing style reveals that she is more interested in writing about her Native American people in a mainstream American cultural context. As the Founding Fathers established the nation not only for America but also for the rest of the world, Erdrich also blends local history with a universally appealing mythical worldview. At the same time, however, Erdrich also understands the problems created by the competing views. Unlike the American society's perception of the Native Americans in the past, I discuss Erdrich's attempts to humanize her characters as they struggle to survive and be incorporated into the main Native American ethnic society without being torn by divided mainstream views of their culture.

キーワード：アメリカ的正義、伝統文化（先住民族）、ネイティブ・アメリカン、人間性

I はじめに

アメリカの標語は「多数の中の統一」(E Pluribus unum)である。またアメリカの歴史は、文化の多様性と国としてのまとまりを同時に保つという試みの連続であった。しかし時代によっては、文化の持つ特異性と保存のみに着目し、その文化の将来について考えることはあまり主張されることはなかった。しかしながら、固有の文化を持っている文化集団にとって、その一文化や民族集団を超えたアメリカという文脈での生き残りというテーマは近年ますます重要になってきているようである。

本稿で取り上げるルイーザ・アードリックは *Love Medicine* (1984) という、先住民族保留地¹⁾という特殊な米国のネイティブ・アメリカン²⁾の現在の状況を背景にした物語でデビューした作家である。彼女自身もチペワ族の血を引くアメリカ人である。そのデビュー以来、ほぼ一貫して物語には伝統文化を背景として描き続けている。しかし、最近の作品は、単なる特異性に依拠し伝統保持という主張に留まらず、個々の伝統や文化を超えた普遍的な物語を書くことへ発展していると考えられる。アードリックの最新の作品 *The Round House* (2012) を中心に取上げ、その物語に見られる普遍性がいかにアメリカ的な物語を描くことになるのかを考察していきたい。

II アメリカ流正義について

まず、アメリカ的な物語とは何であろうか。アメリカの主流文化の特徴としては、アメリカは、はじめから完璧な未来像を持って建設された国であるという考え方が前提にあるということである。それは信仰の自由を求めて新大陸へ渡ったピューリタン(清教徒)たちが、自らは選ばれた民であるとし、「丘の上の町」と呼ばれる理想郷を築きあげたことに始まる。これを始まりとして国の発展を目指すという流れが今日までである。それゆえにアメリカは歴史を通してまだ見ぬ未来像を築くというよりも、前提にある完全な理想社会を実現する歴史の流れともいえよう。

建国時のアメリカ的マインドを持つ者として19世紀末に生きたヘンリー・アダムズ(1838-1907)を例として挙げよう。彼は歴代のアメリカ大統領を輩出したアダムズ家出身である。(2代大統領ジョン・アダムズの直系の子孫、6代大統領ジョン・クインシー・アダムズの孫にもあたる。)彼の生涯は、建国時のアメリカの崇高な民主主義や自由の伝統と19世紀アメリカの変化に伴う新しい社会の価値観との継続的な歴史の流れを見出すことができないことに悩み続けたものであった。

南北戦争時においてアダムズは、駐英大使であった父親の私設秘書としてイギリスに駐在した。当時、彼はイ

ギリスが、奴隷解放よりもアメリカ南部との取引でもたらず経済的利益のほうに関心があるということに憤慨をしている。(69, *Improvised Europeans: American Literary Expatriates and the Siege of London.*) このアダムズの怒りはアメリカ的な価値観の現れである。経済的利益よりも人道や人類史上の民主主義の偉業をなし得るのが本来のアメリカであるとアダムズは信じて疑わないのであった。

しかし同時にこのようなアメリカが標榜する民主主義や良心は、アダムズのみのものでなかった。実はこれは当時アダムズに限ったことではなく、多くのニューイングランドの知識人たちが抱いていた共通の問題意識でもあった。³⁾さらに上述の知識人達が意識する伝統は、現在も脈々と続くアメリカ社会の根底にある世界観でもある。例えば最近では、アメリカ大統領リンカーンのゲティスバーグの演説をかつて批評したフィラデルフィア州地元紙パトリック・オット・ニュースが、150年ぶりに謝罪し社説撤回した事実がある。この新聞は当時の執筆者らの党派心により、リンカーンの演説を「馬鹿げた発言」と批判した。(南北戦争当時、民主党系だった新聞は共和党のリンカーンとは対立していたという背景があった。)演説の画期的な重要性、時代を超越した力強さ、普遍的な意義を認識できなかったという説明をしている。

(『毎日新聞』2013年11月17日付)

アメリカ的良心についてやや長い説明をしてきたが、実はこの考えはアードリックの最新の小説にも現われている。アードリックの最新の小説 *The Round House* (2012) では主人公の少年ジョーの母親がレイプされ、その犯罪を追求し裁くのに部族法はもちろんのこと連邦法等の現行法は結果として無力であるという内容である。そのため、彼は容疑者である人物リンデン・ラーク(Linden Lark)を射殺する。ここで問われるのは、少年ジョーの正義という考えである。この正義という考えは、実にアメリカ流である。これは現行のアメリカの法律に乗っ取った司法の裁きによる正義ばかりではなく、自分の良心に従いその裁きを下すことが重要であろうということが示唆されている。これは多くのアメリカ西部にかつてみられた、司法を超えた決闘などの考えが反映している。アメリカ流自立・自己の確立として、既存の政府の法律・コミュニティの無力さをみた時には、自分一人で決断し戦う必要があるという考えである。自警団の歴史や憲法修正第2条の自己防衛のための武器を持つ権利などはそのような考えから生まれた。この点、この小説も西部の決闘話にある典型的な物語として解釈す

ることも可能である。なぜならば、小説ではジョーの殺人を正当化しているからだ。ジョーは、捕まることなく大人へと成長する。同時に容疑者ラクは、徹底した悪人として小説では描かれている。卑猥なストーカーであり、薬物乱用と酒で肝臓がやられ、透析をしなければならぬ身である (124)。さらにラクの冷酷で薄情な性格を物語るエピソードを挙げるのならば、双子の妹であるリンダ・ウィッシュコブ (Linda Wishkob) との対面場面がある。彼女はラクの母に悲惨な捨てられかた (生まれた時に障害が残り、奇形児として生まれたため、産みの親があっさり養女に出したという経緯がある。) をした双子の生き別れた妹であった。そんな自分の境遇にもかかわらず、彼女は決断して肝臓移植を申し出てくれた。しかしその妹の妹に対して彼は外見の醜い人間に対して自分は反感を持つタイプだと述べ、そういう人間から臓器提供を受けるのはいやだと彼女の前ではっきりと言う。(The Round House, 125) こういう人間をジョーは殺すのである。これは、勧善懲悪いうアメリカ西部の正義の話とも解釈できよう。

III 伝統文化の表象の変化 普遍化

ではアードリックの扱う伝統・文化とはどのようなものであろうか。1990年代前半の初期の作品までは、特徴としてある架空の町を舞台としたある特定の部族の歴史や伝統を背景としたコミュニティの家族たちの現在の物語という限定されたイメージで物語が展開されていることである。そして初期の作品においては、あえてステレオタイプのイメージを通して北米先住民族の生活習慣や特徴的な伝統を物語の中に取り入れる傾向があった。Love Medicine は料理をしながら揚げパンを作って会話する女性陣の場面で始まっている。このパンは現状の保留地に住む先住民族のアメリカ政府連邦局からの配給の小麦粉によって作られるものであり、また悪しき近年の保留地に住む先住民族の典型的な伝統の象徴として一般にアメリカ社会に認識されている。なぜならばこれらの偏った食生活は糖尿病や肥満を増幅させた配給食物として批判にさらされているからである。⁴⁾

ところが対照的に最新の作品では、初期の作品と比べて幻想的かつ包括的な世界観が背景に描かれている。これらは初期の作品においては見られなかった傾向である。アードリックの血筋であるチペワ族の神話というよりは、他の部族の伝説も交えた混成した物語である。最新の作品である The Round House においては、より詳しく様々な部族に共通する言語や伝統や土着信仰や宗教の世界観 (神話) を織り交ぜ、幅広くそれらのイメージを駆使しつつ物語を展開している。しかし、同時にこ

の小説での神話的な世界は一定の伝統・文化に制限されるものではない。例えば以下の話は保留地に移住させられ、飢えてやがて人々は自分たちも獲物として仲間に見られて行く話である。夫婦であるアース・ウーマン (Earth Woman) と夫のミラージュ (Mirage) も次第に飢餓に苦しみ、そして互いを獲物のように見て行く様子が描かれている。

We hunted all the animals before the Moon of Little Spirit and there wasn't even rabbit left. The government agent had promised supplies to tide us over for the loss of territory(…) During this time, every day Akii went out and she always came back with some tidbit(…), She saw Mirage looking at her strangely, and she looked strangely back at him. He kept children behind as they slept and the axe with him in his blanket. He was tired of Akii so he pretended he could see it happen. Some people in these hungry times became possessed. A wiindigo could cast its spirit inside of a person. The person would become an animal, and see fellow humans as a prey meat. (180)

これらの話は独特である。しかし同時に歴史や風習の独特なディテールそのものよりも、人間の感情の変化や葛藤についての記憶が残る。例えばこの場合、飢餓とそれに伴い夫婦のエゴが剥き出しになり、本性を現すという話であり、だんだんと互いに対する気持ちの変化という話の内容に引きつけられる。女の名前は先住民族の言語ではアキ (Akii) であり、先述したアース・ウーマンを意味しその名のごとく頑丈な女であり、夫の名前はミラージュ (Mirage) つまり蜃気楼という名で連想されるがごとく、姿を消しては時折、別の女性の所へ行くという軟弱な男である。彼らの名前や悪い霊の名前 ウィンデイゴ (A wiindigo) は元々、北米インディアン独特の部族の名前に由来する。しかし同時にあくまで話の中心は夫婦が危機に瀕したときの互いに対する気持ちについてである。これらは人種や文化が異なっても理解できる話である。

また別のエピソードでも、登場人物によって独特の歴史伝統が語られる場面がある。しかしこれも上述した逸話と同様にその独自の文化背景よりもそこに描かれている苦難の歴史と生き残ることについての内容のほうに話のおもむきが置かれている。例えばジョーの部族の生きながらえる物語である。Round House の主人公ジョーが、先住民族の知識や言語に通じる祖父 (Mooshum) モアシャムと、ある夜ジョーは一緒にベッドで寝ることになる場面がある。やがてモアシャムは昔話を夢遊病者の

ように眠りつつも語り始める。(179) その内容は部族の苦難の歴史であり、幾度となく危機や絶望がある。先述したようにコミュニティが飢餓に苦しむようになり、仲間からアース・ウーマンは殺されそうになる。彼女と息子のナナプッシュ (Nanapush) は仲間から逃れさまよい、やがて息子は救世主である伝説上の生き物ホワイト・バッファロー・ウーマン (White Buffalo Woman) に出会い、寒さをその獣の毛皮で凌ぎ、その肉を持ち帰り、仲間と分かち合うという話である。モアシャムのアース・ウーマンとナナプッシュの話の要点はホワイト・バッファロー・ウーマンとの幻想的な出会いではない。因習にとらわれず、コミュニティを出て、そして行く末は誰にも分からず、それを考える余裕もない日々の中で生存そのものに自分の希望を託した。その結果の出会いであることだ。アードリックの作品にみられる逸話の挿入は現代の世界とは直接に関係ない。しかし、そこには伝統文化と現実が共有する普遍的価値が示されている。そしてそれゆえに現代にも繋がる話として活きるのである。

このように幻想的な逸話をふんだんにアードリックの最近の作品では、取り入れる傾向がある。しかし逆説的ではあるが、むしろそれだからこそ、これらの世界観が全く現実の世界からは異質なものとして描かれているにも関わらず、外の世界の人間にとって理解できるという効果がある。それらの世界観はより普遍的な価値を分かち合うものとして理解することが可能であるからだ。先述した伝説を通して描かれている夫婦の在り方や苦難と生存の歴史は想像しやすい。そして主流文化のアメリカ流裁きもそうである。アメリカの特有の地域での事件に対する正義は、外部の人間にとっても基本的には理解できるということである。歴史背景や地域文化について詳細な知識はないにしろ、人間の根底にある考えに共鳴するわけである。ジョーの環境や歴史はアメリカ独自のものであり、また容疑者ラクの環境も複雑ではあるが、ラクが徹底して悪く、ジョーが執拗に犯人探しに躍起になり追いつめるという流れは理解できよう。

またアードリックは最近、初期の作品を改訂している。その際に登場する主人公たちの名前は、オリジナルでは先住民族独特の名前がつけられていたが、それがごく一般的なアメリカ人の名前に変更され、物語が展開されるようになった。しかし、同時に指摘しておかなければならないことは、アードリックの登場人物の名前の変更は物語自体を変えているわけではないことである。プロットの進行は同じである。物語において同じ境遇をおそらく読者にとって感情移入や共感しやすい、登場人物をありきたりなアメリカ人の名前に置き換える（そして若干の場所等の変更もある）という試みには、物語の根底に

流れる主人公の感情ややるせなさ、あるいは人生の残酷さに共感してほしいという意図があるのではないか。この場合、デビュー作の中の一作品 *The Red Convertible* の改訂版において登場人物の名前の変更があった。⁵⁾ この話は仲の良い兄弟のうち、もの静かで賢明な兄がベトナム戦争に出兵し、帰還したら別人になって人生に絶望し、最後は自殺ともとれる兄の溺死について弟の視点から語られる話である。これはすべての人間に共通するテーマである「人の脆さ」についての物語であり、登場人物の名前や場所を伝統や文化を特定しなくても理解できる話である。

IV 現在の表象 現状の行き詰まりと伝統の形骸化

アメリカの建国から培われた理想的な社会の実現を求める主流文化と想像豊かな伝統は、ともに普遍性がある。ではこの二つの世界観の潮流が合流するような現実はどのように描かれているのだろうか。アードリックは現実とは理想とはほど遠く、反対に邪悪で秘め事の多いコミュニティの闇を描いている。例えば小説の核心である、ミネソタ州知事と先住民族の女マヤ・ウルフスキン (Maya Wolfskin) の間に生まれた女の子の虐待と殺人という事件や、その事実を部族の裁判所へ訴えた記録を確認しにいったジョーの母親がレイプの被害にあうという物語の展開がある。また、ジョーや友達を教育する神父の実態は粗雑で乱暴な元海兵隊の男であるという設定などが挙げられる。(108)

そして彼女が描く主人公達の伝統文化へのコミットメントは現代的である。主人公達はたいした思入れもなく日常の延長線としてその文化を受け入れられている。伝統的なアメリカン・インディアンのスチームバスの儀式では、ジョーとその友達はそれぞれスチームを作るために起こした火が消えないように見張る役目をあたえられていた。しかしその間、そこでその聖なる火を使ってホットドッグやマッシュマロを焼きながら、少年たちが卑猥な冗談を言い談笑しているなど、伝統維持を担っている者たちの現実が描かれている。(36-37)

また歴史的圧服の中で維持されてきた部族の慣習がエピソードとして紹介されてもいる。1978年以前、先住民は自分たちの宗教を信仰することは禁じられていた。それゆえにこの物語では当時のアメリカン・インディアンの狡猾さも想像豊かに描かれている。例えば牧師やアメリカ連邦政府インディアン局 (BIA) の部長が保留地に到着するころには、実際使われていた太鼓、鷹の羽、薬草を入れた袋、昔から伝わる巻物や聖なるパイプを詰めた船をすでに湖の半分くらいまで進ませ、その代わりの

聖書を出し旧約聖書の伝道の書の箇所をみんなで読み上げてという演出をするエピソードが描かれている。(59-60)

V *Round House* の意義 人間性を求めて

このような現実と形骸化した伝統文化のなかでジョーの置かれている立場はまさに自分を大局的に見る視点を欲しているのであろう。当初は戸惑いがあるものの、話が進むにつれ、ジョーは積極的に犯人探しに関わるようになる。この小説は成長したジョーの口から語られているという形式なので、特にジョーのその当時の心情についてと周りの接し方に距離があることは理解できる。事件を解明しようと突き進むジョーに対して、周りは止める。これも父親を始め周囲が、事件のトラウマからジョーを守るべく、なるべく事件そのものに触れないように避けている状態である。しかしジョーは青年へと成長する過程で、まわりの大人が彼を未だに子供扱いすることに不満を感じている。事実、思春期の少年特有のほろ苦い経験もする。例えば、友達 (Cappy) キャピの早熟な恋、結婚まで考えたことを聞かされることによる自分の未熟さを感じる、あるいはジョーの叔母に対する淡い恋を通しての女性に対する性的な目覚めなどが描かれている。(303-304) つまり真実を受け入れる準備がメンタル的に出来ていることである。しかし誰も彼が成長しているという事実を指摘してはくれないのである。

自分の置かれている状況や将来が見えないなかで、少年ジョーは自分なりの正義を追求し、自分なりの決断と裁きをする。それが可能になったのは、先述したようにアメリカ流裁きの伝統の影響で彼がアメリカ人としての自分を体現しているからである。つまり自分の本能・人間性に従った結果ではないかとも考えられる。この点に関して、彼の人間性の芽生えとして *The Round House* という存在の影響も大きい。

The Round House とは先述したホワイト・バッファロー・ウーマンをモチーフとした建物である。そしてそれは、かつてアース・ウーマンの息子であり現在はコミュニティにおける伝説の語り部であるナナプッシュという老人が若かりし頃、遭遇したとされる伝説の動物である。彼は後にこの建物の設計に関わり、建てることをコミュニティに要請した。(214) 繰り返しになるが、この動物に彼が出会ったのは、強制移住がアメリカ政府により先住民民族に対して始まり、狩猟が基本の生活に支障が出始め、不慣れた生活のうえにさらに政府からの支給が滞る日々が続く、飢餓が発生した頃である。お互いに殺し合おうとする中で、殺されそうになった母親と保留地から逃げ出し、母親に促され一人で獲物となるホワイト・バッファ

ロー・ウーマンを探す。やがてそれを仕留めるが、吹雪に遭い、その獲物の中で一晩過ごすことになる。(186) この獲物はその名前の通り、単なる獲物ではなく人間と会話をし、未来図のようなものを語る。その後、物語ではその肉を後から探しにきた母親と持ち帰り、殺そうとした部族の人間と一緒に肉を分け、飢えを凌いだという物語である。(187) この獲物は当時の先住民民族にとって衣・食・住を支える不可欠な存在であった。つまり部族をまとめる象徴としてホワイト・バッファロー・ウーマンはイメージされていたのである。*The Round House* は、ナナプッシュにとってホワイト・バッファロー・ウーマンを想起させる家であり、それは飢えや寒さを凌ぐ象徴であった。さらに重要なこととして、保留地という制限された場所から自由に自らの場所を求めてさまよっていたときに出くわした獲物であった。慣習にも頼れず人間として本能しか頼れない一人の時に遭遇した未来を語る存在に出会ったわけである。

この物語はジョーの状況にもあてはまる。彼もまた母親と強い絆で結ばれた息子である。そしてナナプッシュのようにジョーにとってもこの家に出会うことは、人間性を確認することである。実際、この建物はホワイト・バッファロー・ウーマンという伝説上の動物をモデルにしたものではあるが、自然遺物ではないことを思い出すことは必要である。だからかつてのような伝説上の獲物のように人間と会話する、あるいは将来のビジョンについて何ら仄めかすことでもない。正確には、その遺物は伝説の話をモチーフにして作られた人工遺物である。そこは自分の母親が事件にあった忌まわしい場所であり、関連した事件が起こっていた場所である。実際、*The Round House* は人々の神話や想いとは対極にある物質である。人間の営みや関係とは無縁の物質/建物にすぎない。

しかし逆説的であるが、この *The Round House* という物質を見ることは、対極にある人間性について考えることにもなる。この小説の登場人物達は人間としての本質をこの建物を通して悟るということである。犯罪が起こり、そこから征服力、性欲や人間のエゴがうずまいたところである。そして自分の本質に接し、本質を通して自分を認めるということである。つまり *The Round House* とは、善悪を含めた人間性を象徴するものであろう。ホワイト・バッファロー・ウーマンによれば、ナナプッシュはみんなと反対のことをしてきたので生き残ってきたのだという。(214) 彼は生き延びるために部族に従わず、本能のままに母親と逃げた。それならば、彼の建てたこの家は、まさにそういう人間性を認めるために建てられたということにもなる。

VI おわりに

初期のアドリックの作品の特徴であった、現実の保留地に住む限定された部族の物語と比べると、彼女の *Round House* 等を含める最近の作品は、より詳しく様々な部族の伝統文化の表象が多い。それらは普遍性があり、かつ幻想的な世界が描かれている傾向がある。しかし同時にこれらの試みに加えて、反対の試みも成されている。まず、登場人物の名前を従来の部族的な名前から一般的なアメリカ人の名前へとオリジナルの物語から改訂版では変更していることである。さらに以前より保留地とアメリカ連邦政府との関係の歴史を可能な限り詳細に描いていることである。これらの一連の変化を見ていくと、最近のアドリックの小説では、太古から続く先住民族の壮大な伝説や歴史背景に実際の歴史によって翻弄された人間の考え、行動、そしてそれによって露呈された人間性を取り入れながら小説を描くということに関心が移行しているといえる。これらはアメリカを理解するうえで欠かせない視点でもある。それは普遍的な価値を推しつつも、同時にその過程で起こりうる矛盾も含めるのがアメリカ流の世界観であるからだ。つまり地域と世界、非日常と日常、伝説上の動物・人間という相対する世界や存在との関係において、その中で芽生える人間性に着目することである。アドリックは、アメリカにおける先住民族の伝統文化の生き残りと発展とも読める小説を、この人間性の芽生えを通して示唆している。

注

- 1) アメリカ連邦政府によるインディアン政策は1830年に連邦議会によって制定されたインディアン強制移住法に始まる。この法案はミシシッピー川以東に居住する諸部族を対岸西方の遠隔地に追いやり土地を明け渡せるのが狙いであった。この法案により先祖伝来の土地を離れアメリカ政府の指定する居留地に強制収容されることとなった。有名な話にチェロキー族のオクラホマ州への移動がある。過酷な真冬の5ヶ月に渡る移動であり、4000人もの死者を出したことから「涙の旅」と呼ばれている。鶴谷壽『西部博物誌』新人物往来社（1987）pp.228-229 参照
- 2) アメリカ先住民族の呼び名にはネイティブ・アメリカン、北米インディアンあるいは文学史やアメリカの歴史の過程で使われている呼称「インディアン」がある。本稿では一般的に呼ばれているネイティブ・アメリカンを使用した。
- 3) アメリカ社会において特に東海岸のボストンに見られる社会階層意識として Brahman という呼ばれる

- 階級がある。インドのブラーフマンに因んだ名前である。これはアダムズ家などニューイングランドの旧家出身の家の人々を指す。古きよきアメリカの倫理観や伝統を信じ他のアメリカ人とは生活様式、教育や愛国心において一線を画く人々である。19世紀末に当時のアメリカについて憂慮したニューイングランドの知識階級に属する人々ヘンリー・ジェームズ、T.S.エリオット、エズラ・パウンドなど。詳しいボストンの階級意識とアメリカとの関係は渡邊 靖（2004）『アフター・アメリカ』慶応義塾出版大学出版会を参照。
- 4) ネイティブ・アメリカンの典型的な食事として、フライ・ブレッドがあげられる。しかしこれは伝統料理というよりも、連邦政府からの配給の小麦粉から考案された食事であり、高カロリーで現代の先住民に広がる糖尿病の一原因とも考えられている。詳しくは鎌田 遵（2009）『ネイティブ・アメリカン-先住民族の現在』岩波新書 pp.157-161 参照。
 - 5) オリジナルの作品では兄弟の名前は Lyman Lamartine and Henry junior であるが、改訂版（2009）では Steve と Allen と改名されている。

参考文献

- Erdrich Louise. *Love Medicine*. Florida: Bantam Book by arrangement with Holt, Rinehart & Winston Bantam Book, 1984.
- . *THE RED CONVERTIBLE: selected and new stories 1978-2008*. New York: Harper Collins Publishers, 2009.
- . *Round House*. New York: Harper Collins Publishers, 2012
- Zwerdling, Alex. *Improvised Europeans: American Literary Expatriates and the Siege of London*. New York :Basic Books, 1998.
- 鎌田 遵 『ネイティブ・アメリカン-先住民族の現在』岩波新書 2009年
- 鶴谷 壽 『西部博物誌』新人物往来社 1987年
- 渡邊 靖 『アフター・アメリカ』初版、慶応義塾出版大学出版会、2004年。
- 『毎日新聞』2013年11月17日付け（朝刊）。